

昭和二十四年七月二十三日
昭和二十三年三月十五日
第三種郵便物認可
第三行（毎月一回・十五日発行）

（通第三四五号）

慈光

次

信 仰 の 奥 底……………近角常観……………①

「業」の思想と修養……………白井成允……………⑦

歎異抄のすすめ③……………田村実造……………⑪

一 道 会 の 記……………柳原徳草……………⑬

目

念 仏 詩 抄……………木村無相……………⑳

法 味 断 片……………花田正夫……………㉓

第三十卷

第三号

信仰の奥底

近角常觀

近時、諸方面に信仰を求める声が高くなったことは、大いに喜ばしい事と思えます。然し近時の信仰界の状態を見ると、唯いたずらに信仰の叫び声が高く広くなったばかりで、信仰問題の切要なる急所、奥底にふれていないようである。この点から考えてどうも浮き足である。真面目に仏の眞実の呼声を有り難く頂いた人が甚だ稀であるように思えるから、今殊更にかどをたててその急所をおさえ、その奥底をお話しようと思うのである。

古来から信仰上の問題について種々あろうと思うが、近時の青年間において多くの人のいう信仰上の傾向について陥りやすい問題を注意しようと思う。すこし評論的になるが、凡そ信仰には消極的方面と積極的方面と二つがなければならぬ。しかもこの二者は決して二つあるのではなく一つになるのである。ところが近時多くの人の言う信仰問題は、単に消極的方面を述べる者はいたずらに積極的な言辭をとり、積極的方面の光明面を説かず、これに反し積極的方面のみ述べる者はいたずらに積極的な言辭をとい

て、他の一面に消極的方面を欠如しているようである。

今これを具体的に云えば、信仰は一面には人生の一切を棄てる意味である。人生のすべてのもの、財産も、名利も、地位も、妻子も、肉体も、道徳、学問も、乃至人生の何ものも一切吾人のあてにならぬものである。然るに、このあてにならぬ人生に、ただ一つあてになるものがある。それは眞実如来のおまことである、如来のおまことを頂いて行くことである。人生において何れの力も及びがたい煩惱具足の凡夫、火宅無常の我等ではあるが、唯如来の本願念仏のみがまことにておわします。このおまことは本願一実、無碍の大道であるから、この大道に帰入したてまつった信心の行者は、天神地祇に尊敬せられ、魔界外道も障碍することなく、日月星辰も護持養育したまう。かくの如き如来のおまことを信することによって闇黒の人生は、光明四方にみち、事々物々みな如来の大悲ならざるはなしという確信に到達し得るのである。これ即ち眞実なる信仰の状態であるのである。

然るに近時多くの人の信仰の説示を見ると、積極的に説く人々は、初めから人生はこれ光明ならざるなく、慈悲ならざるなしという。然しその説くところの積極的方面は、

一面において、いまだ消極的方面を持たない積極的であつて、つまり不具な積極的といわねばならぬ。

極言すれば、人生の一切ごとく吾人のあてになるものなしと否定し、唯あてになり、頼りになるは如来の本願のみと、念仏の一道に帰入してこそはじめて「現世利益和讃」にあるような諸の恵みは与えられ、人生は光明で満たされるといふ確信を頂くのである。而もこの現世利益、摂取護念されるのは信心の人に与えられる所謂余徳であつて、まず我々の頂かねばならぬものは、南無阿弥陀仏の如来の恵み一つである。

南無阿弥陀仏とは、はじめから決して疊をたたいて南無阿弥陀仏、衣の襟をたたいて南無阿弥陀仏と現わるるのでなく、人生において煩惱具足、火宅無常、虚仮不実にして一つの誠なき者を憐み給う如来の清浄眞実が南無阿弥陀仏である。であるから南無阿弥陀仏を頂くには単に初めから人生のすべてが恵みである、光明である、南無阿弥陀仏であると、ひっかぶせようとした所が駄目である。一面において人生のすべての金銭、財産、地位、親子であろうが、たとい念仏であろうが、自分でこしらえ自分でお慈悲であ

るときめこんだのであれば駄目である。

で、我々の頂く所の念仏は、かくの如く人生の何ものも頼むところなき火宅無常の我等を見捨てたまわぬ大悲の教え、本願の招喚の勅命のみが眞実であるのである。この如来の眞実のおまことに夜が明けてこそ、はじめて如来摂取の光明裡につつまれ、諸仏護念の利益にあずかるのである。その結果として人生ごとく大積極の光明裡に摂取されるのである。しかしこれは前述の如く、人生の一切を捨てた消極があつて、如来のお慈悲ばかりという関門を通過してはじめて、吾人の前に展開される広寛な天地である。

然しはじめから罪惡深重の我等、火宅無常の世界に目覚めずして、人生の事々物々を頭ごなしにお慈悲であるといふのは、消極的方面の欠けた不具の積極の光明面であるといわねばならぬ。これでは、人生の一切は何物もあてにならない中に、あてになるは唯如来ばかりという一念帰命の肝要な急所がないのである。これはあまりに露骨の云い方であるが、信仰上最も切要な問題だから、能く心を潜めて考えねばならぬことである。

勿論ここに注意すべきは、はじめより人生ごとごとく闇黒なりと苦惱しておる人が、人生の事々物々は如来の恵みであり、お慈悲であると、大悲の招喚を聞いて信仰を得る

こんな教えを聞いた―例えば路を歩いている。路側に騒がしく人々が集っている。何だろうと思つてその人ごみの中に入ってみると、二人の男が喧嘩をしている。その争いの顔色、言葉、動作などが眼に写ってくる。この眼に写った印象は、或は極く浅くすぐ消えてしまふかも知れないが、消え去つたようでも実は真から消失するものではなく、それは意識の奥に深く蔵せられている。それがその縁がそなわり、周囲の事情がそれになうてくると、潜在した古い印象、その争いの諸相が私自身の上に再現してくる。

この教えを聞いた時、私は真理の単純さに驚いた。これは間違ひのない真理だと思つた、同時にその恐ろしさに身震いした。こんな恐ろしい真理が行われている人生で私はどうしたらよいのだろうかと思つた。

教えを聞けば、私が路傍でふと人の争いを見た。その見るはたらきは、道徳的に考へて、善きはたらきとも、悪きはたらきとも云えない、即ちただ無記のはたらきである。

こののはたらきを古くから業と呼んできた。これを道徳的には善業・悪業・無記業の三種に分けられる。道徳的に無記の業で、それがすぐ忘れられて潜在してしまうのであれば、深く注意しなくてもよきやうであるが、然し敵しく尋ねると、諸縁が集まると、丁度日光や土や水などの縁が集ると種子が芽生えるように、争いの相が私の心身に現われて、私自身が争う人となるのであるから、これは極めてつつしみ省みるべき事である。私の心の、或はむしろのちの根源の力が極めて微細幽妙にはたらいて、たちまち善に、たちまち悪に染みついて、やがてその相をあらわしてくることは、どうにも避け難いのであるから、自分の生活を純淨に善であろうと願う者にとって、この事實は全く恐るべき真理なのである。いわんやひとり自己の生だけに止まらず、むしろあまねく他の生の善を願う使命をもつ者には、この恐ろしさはひしひしと身に迫るのである。

○
それでも「業道は秤の如く、重きもの先ず牽く」という言葉もあるし、ここに述べたような軽い無記の業の力よりもっと重い善悪の諸業を私共は日夜にやっているから、私共はまず悪業をつとめて避け、善業をつとめるように心掛けるのが急務であつて、かの「諸の悪をば作(な)すこと莫(な)く、衆の善を奉じ行い、自らその意を浄うせよ。これぞ諸仏の教えなり」という所謂、七仏通偈(しちぶつうげ)も存することであるが、それにつけても「自らその意を浄うせよ」という教えは、これを徹してゆけば、必ず遂に上に述べた無記の業の事にまで到らねば止まないのである。

○
然しこの例のように路で争う人々を見るときのような事は、人間界の普通のことである。この人間界には争鬭、怨恨、貪欲、嫉妬、瞋恚、愚痴等々、諸の罪惡が到る処に行われている。のみならず、自分が生きるために他の生命を犠牲として奪わねばならないというような根本的な矛盾欠陥を蔵している。随つてここに生きていく限り私共はどうしても悪果を蔵する業を、たとひ無記の業にても、作らずにはいられない。ここに道を求める者が世間を通れ、家を出で、山林に入るのである。則ちできるだけ悪縁を避けてこ

○
れから遠ざかり、身心を清淨に保つて、善業にしたいからである。然し、山林に入り悪縁を避けて己が心身の清淨を求める、それによつてたとい己れは清淨を獲たとしても、父母兄弟はどうなるのであろう。又一般の他の人々はどうなるのであろうか。その人達が悪縁の充満した世間にあつて、それから脱し得ないで苦しんでいるのに、己れ独りどうして清淨を樂しむことが出来よう、これでは利己、独善の境に止まる者で、その志願の低劣さ、ともにくみするに足らぬと云うべきであらう。まさに願わくは父母と共に、同朋大衆と共に、眞實、清淨をともしたいというのが、私共のまきにおこさねばならず、完成せねばならぬ志願である。と聞いている。

○
業の教えの中に共業(くごう)不共業を分つてゐる。例へば、太郎は太郎として次郎とは置き換へられない特殊の個性を持つてゐる。これは太郎の今までに爲した業の中に、次郎のそれとは共通でないものがあつた必然の結果である。然し同時にまた、太郎は次郎と父母を同じうする。これは太郎の業の中に次郎のそれと共通なものがあつた事實の結果である。

私共は共に日本人として生れ出るべき共業を爲した。そして中国人とは不共(ふく)な業を具へている。同時に又、

真の安心を得る者もあろう。これもまた前者の場合と同様に聞者の境遇によるのであって、多年信仰問題に苦悶し、信仰を獲得せねばならぬ、如来に帰命せねばならぬ、雑行を捨てねばならぬと、安心問題で煩悶している者にとつては、幸に頼むにあらず、信ずるにあらず、このままであるの一言を適切に感じ、真の信仰に入る場合がある。しかしこれは自力の迷心にかかわって居た者に対して、自力心で頼むにあらず、自力を捨てざるべからずと云うたものである。しかし多くの消極的言辞を用いる者は、このように大悲の上から言うのでなくて、行者の方から信心もいらず、安心もいらずと定めてかかるのである。

一日私の宅へある人が訪ねて来て「私は改悔文のような信念を得られず、雑行も捨てられず、弥陀を頼むことも出来ず、このままのお助けである」と云われた。私はそこで「貴君のこのまは、こちらからのきめ、ごみのこのままである。このまとは、信心も要にあらず、雑行も捨つるにあらずというような意味ではない。このまとは如来の呼声である。汝一心正念にして直ちに來れと、直ちにとは、悪人は悪人ながら、罪ある者は罪ありながらとの如来の呼声である」と云うと、其人は涙を流して「今こそはじめて如来の大悲に夜が明けた」と喜んだ。そこで私は「それが自力の心を捨てたのではないか、それが一心に弥陀をた

のむのだでないか」と語ると非常に喜んで帰られた。

然し、現今の消極的に繰返す人々は、大胆にも、信ずるにもあらず、雑行捨つるにあらずというが如きは、決して真の大悲の恵みを受け入れた者ではない。即ち積極なき消極である。即ち「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はみなもてそらごとたわごとまことあることなし」の一面のみ言語を繰返すも「念仏のみぞまことにおわします」という積極的方面が欠けている。如何に我々が、手をはなち、足をはなち、あれもこれも捨てたところで、弥陀仏の願力に乗じないことには、あわれ悪るかりし、人生は無常なりしと、手をはなつ真の消極は実現せぬのである。

以上は多く信仰の側面から評論的に述べたのであるが、こう云わねば、信仰問題の急所をおさえ、奥底を叩き得ないからで、決して他意があるのではない。それでは真の信仰の光景、即ち消極の信仰の光景は、如何にして生起するかというに、そもそも我々が、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界と気づくのは、自己の力ではない。罪惡深重と氣付き、火宅無常と氣付くのは、自分が苦悶した力や境遇によるのではない。如来の呼声に「仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫」と呼び、「阿弥陀如来の仰せられけるようは、末代の凡夫、罪業の我等たらんもの」と如来よりの呼

ゲエテ語録

○ 常に現在を離れてはいけない。各々の瞬間は永久というもの。の面影である。従って無限の価値がある。

○ 自分と性質の似ている者を愛して、それを友達にするという風な人々と、自分と性質の反対している者を愛して、それから学ぼうという風な人々と、二様ある。

○ 人は他人からあざむかれるものでない、自分で自分をあざむくのである。

○ 真の自由とは、物ごとにその正当なる価値を認めることである。

○ 自分の身は小さく限られたものであることをよくよくわきまえた人は、最も完全に近い人である。

○ 矢のように過ぎ去る一生涯なのに、或る事に際してそれには自分の年齢が行かな過ぎるとか、又は老け過ぎているとかで、工合の悪いことが沢山ある。

信
声に氣付かせて頂くのである。即ち我々を罪惡深重、煩惱具足の衆生と大消極に宣言し給うて、ことにそれらの衆生を、我能く助けんと大積極の願力を現わしたまう。ことに如来の「我能く」とのたまえる「能く」の字は、実に絶対無限の力をあらわされている。愚禿鈔に「能くの言は、不堪に対するなり、疑心の人なり」とある。能くとはあたうという文字である。如来の大慈悲の深きことは、罪惡深重の凡夫をたすけ能うという大悲の言である。この大悲の我々の心に貫徹した一念が、ああ今までは知らなんだ、我こそ仰せの如く現に罪惡生死の凡夫であったと、頭のさがったのが機心の深心である。我の今迄きづけなかったのは、「我能く汝を護らん」の大積極の呼声が聞こえなかったためである。然るに如来の清浄の願力に乗じて、疑いなく往生を遂ぐるなりと信ずる一念に、我は過去から浮かぶものでなかった、現在も常没常流転、未来もまた沈み切った石の如き我等を助け給うは弥陀如来なりと大積極の信念を實現するのである。これが大消極即大積極の妙味であって、機法二種の深心、即ち如来の勅命に喚び起こされた大消極大積極の心持である。

信
以上は信仰問題で別に珍らしいことでないが、近頃信仰の急所奥底に到達していない者があるので、遠慮なくことさらに角を立てて申上げたことである。

人がある。これは畢竟（ひっきよう）この積極的に説くのは、消極を通過したのではないが、一方に苦惱している人に適當するから、反って頂く方の人に、あてにならぬ世にあてになるは唯如來の本願であると安心を得たのである。

然るに世間の多くの積極的方面を説く人も、又これを聞く人も、人生上のすべての境遇そのままを人生的につかんで、金錢、妻子、地位、乃至外界の事物そのものをつかんでこれを恵みなりと云う時には、それを人生的に失うた時に、あだかもその恵みが消えたように必ず失望することがある。ことにこうした場合に、ただ外界をつかむばかりでなく、ついに自分の行為そのもの、即ち我々の罪惡の行為そのものをも恵みなりとつかむのである。かく罪惡をもつて恵みなりと云つても、自ら中心にこうは思えないのは云うまでもないが、自分の悪行をも恵みなりと思う人も、人生の困難に出遭うと行きつまってしまふのは明らかである。近頃この様な傾向をもつた人が多くなって、今まで自己が抱いていた考えに仮定的な信仰であったと気づき、その苦悶を訴える者が多くなった。これは消極的一面を欠いた積極的一面の主張の間違いの証明である。

そもそも従来の信仰問題において、如來の恵み以外のものを混じるのを雜行雜修というのである。雜行雜修とはあながち弥陀仏以外の諸仏を念ずるといふばかりではない、

々のあてになることを現わしているのである。この如來ばかり、念仏ばかり、本願ばかり、親心ばかりという関門を通過せねば、信仰問題の眞の奥底に達したとは云えない。

くれぐれも多く信仰問題に頭を悩ます青年諸君に云う、この消極のない積極は眞実の信念ではない。勿論この問題は今さら新しい問題ではない。形こそ相違しているが、昔から理論的に世界万象は眞如の発現とか、宇宙の本体は眞如なりとか、仮説的に論じて信仰が成立したかのよりに思う人があるが、これも消極のない積極の信念である。これをまた理論から離れて、如何に修養的に、もしくは信仰的にいっても、我々は虚偽不実であり、罪惡深重である。

かかる者を救済し給うが如來の清淨眞実のお慈悲である。この呼び声を聞き得た一念に、ああ我は到底浮かぶ瀬のない罪惡の魂である。この世はあてにならぬ、我身で浮かばんとしたのは大間違いだつたと、すっぱり手のはなれた心持、所謂「ふりすてた」心持の大消極がなくてはならぬのである。これでこそ如何なる愛別離苦に出会うも、煩惱の境に入るも、これなればこそ如來に御心配かけましたとあやまり、且つ安心させて頂けるのである。

以上は積極的言辭を用いて、消極的方面を閉却した場合を述べた。ここに注意すべきは消極面を通過せぬ者は、

人生ただ如來の慈悲のみという以外に、自己を頼みとし、他人を頼みとし、外物を頼みとする等をいうのである。

信仰の要点は、專修專念、一向一心に如來を頼み奉り、如來の本願念仏を頂くことにある。このような大消極があつてはじめて現われた大積極の信念こそ眞実の信仰といふべきである。阿含經の説法の尊いのは、人生の一切は我等のついでよるべでないことを説き、最後に至つて唯一涅槃ばかりが一切衆生の大安住地であることを示された点にある。即ち苦空無常無我の人生を捨てて、眞に涅槃の大安住を見出すにある。この涅槃寂靜の光明が大乗仏教では眞如と現われ、実相と現われ、常樂我淨の大積極の光明と現われたのである。

蓮如上人が常に「もろもろの雜行雜修自力のころをぶりすて」と仰せられるのがこの大消極である。この大消極の最後に「一心に阿彌陀如來、今度の一大事の後生おんたすけ候え」と唯一絶対の光明の現われた所が最もありがたい所である。歎異抄の「何れの行も及び難き身なれば、地獄は一定すみかぞかし」というはこの大消極である。この何れの行も及び難き身が、「唯念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」と、よきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなりである。この唯という意味は、人生の一切が何等のあてにならぬ中に、唯お慈悲ばかりが我

眞の積極になれないから、この様な積極は眞の積極ではない。唯言葉だけのお慈悲や、光明やであつて眞実でない。

さてこれと反対に、又言葉の上で消極ばかりを説き、更に積極の光明の出ない者がある。これはむしろ地方に多く見られる。その説は、喜ぶのも信心でない。楽しくなるのも信念でない、雜行捨てるにあらず、弥陀たのむにもあらずと、すべての信心安心に関する言語や思想に対して否定の言を用い、徒に消極的にうばう方面のみ主張している傾向がある。あだかも前記の傾向が信仰問題をすこぶる散漫に、広く宇宙の事物にひろげたのと正反対に、この思想の傾向は信仰問題に没頭してただ徒らに百非を繰り返すばかりである。然もその消極は徒らに言語上にくりかえされるのみで、最後に至るも何等の光明をももたらさないから、やむを得ず「このままお助け」とか「ただのただじや」とか言語が窮してしまうのである。しかも如來の深い慈悲方面を説かず、多くの信徒は思想上の混乱を生じ、右にはならぬ、左にふりすて、徒に信仰難を叫ぶ状態に陥るのである。これは青年よりもむしろ老人間に多いように見受けられる。これらの人々は消極的方面のみ説いて、最後に「ただのただ」とか「このままながら」とか「無条件の救済」といっているが、決して眞実の如來のおまことに夜が明けて云うのではない。勿論、このままながらと聞いて

中国人、ソ連人、米人とも共に人類として生れ出るべき共業を爲した。そして禽獸、虫魚とは不共な業を作つていた。けれどもまたあらゆる禽獸、虫魚と共に山川草木土壌と共に、この地球上の一切万物と共なる業を爲した。此等の例によって業の共及び不共というものが何を意味するかおのずから明らかであろう。

この共業の考えは、前述の「まさに願わくば衆生とともに」という広大な志願を省みる時、いかにもよくわかる。例えば、日本人として私共は過去すでに久しく日本人的共業を爲してきた。その善悪、苦楽を共にして来た。又単に日本の民族と共にだけでなく、日本の国土と共に。随って日本国が、人民も国土も一緒に現在の相を顕わしている。それに即して、道徳的にこれを徹底的に考えると、私共の一人一人各自の過去久遠劫来に作ってきた業が現われているのであるから、それに対して各自がこれを作り出した責任を負うべきものである。われ一人清浄を欲して山林に入るなどという志願は、それだけで止まる限りは、この共業の因果に即する嚴肅な道徳的責任を逃避する卑怯な考えである。衆生と共に、国土と共に、あまねき業の果を負いつつ、まさに一切とともに清浄を獲んという志願こそ、まさにこの共業の教えに合うものである。

現実の力はまさしくこのようである。古の賢哲はこの真理を教えて、或は「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫 曠却よりこのかた常に没し、常に流転して、出離の縁無き身と深信ず」と云い、或は「いづれの行も及び難き身なれば」とても地獄は一定すみかぞかし」と教えられた。

一切衆生と共に清浄にいたらんと念願に生くべきだと自らはげむ者は、まさしく自らの罪業の因果に面して悲泣雨涙せねばならぬ。

氷は熱に融けて水となり湯となる、薪に火がつけば燃えて即ち火となる。争いの相を見た刹那に忍辱哀愍の心が動き、食欲怨恨の念がおのれの胸中に兆した刹那に、即ち慚愧懺悔の情が流れるならどうであろう。鬨争の縁は転じて和楽を開く機となり、瞋恚の焰は忽ち身心を清凉ならしめる水となり、単におのれ一人ばかりでなく、同時に周囲の人々をも境遇をもすべて善化し美化する無碍の大道が開かれるであろう。こうなつてこそ衆生と共に、国土と共に清浄にいたることが出来るのである。

氷をとかず業力をもつものは熱である、薪を燃やす業力は火である。怨恨鬨争の念を忍辱平和の情と転せしめる業力は何であるか。曰く、仏力である。仏はこれ一切衆生をその淺間しい業の因果から解放し、無知の苦惱から救済

世間に惡あり不浄あり、これを避けねば己れの清浄は期せられぬ。しかも己れが清浄でなくてどうしてよく世間を清浄ならしめ得ようか。このために、まさに衆生と共にとの願いを懐きながら、否この願いを懐くが故にこそかえつて、独り世間を遁れるという途もある。この途はその窮まったところ即ち直ちに還つて、出でて世間の中に入り、入りて世間一切の汚穢、不浄、罪惡に直ちに触れてこれを浄化する絶対の力を獲なければ、眞実の意味はないであろう。これは其の志願が、最初から世間を避けて自己一人の利を獲んとするものではなく、ただ世間とともに清浄たらんとするもの、即ち共業の責任を知つて、利他の大行をしようとするものである。このような志願に生きる者は、世間からの逃避でなく、世の中に在つて群生を荷負する大行のための修養を積まねばならぬ。

さて、このような志願に生くべき者として、あらためて私自身を省みる。私は最初に記したように、一寸した争いの光景を見ても、その惡影響から脱し得ない者である。このように弱い者が、どうして能く不浄罪惡にみちた世間を荷つてこれを浄化することができよう。これこそ身を挺して汽車の運行を止めようとする類である。

自業自得、業の因果の教えをそのまま頂戴すれば、私の

し、眞実無漏(むろ)清浄の境に入らしめんとの大願を起して精進奉行し、遂にこれを成就して、即ち無碍の徳力を具するに到りたまひ、その徳力を常に衆生に恵み施してやみたまふことではないのである。仏の大願業力に触れる者は、自ら煩惱惡業の身でありながら、その惡業の動く刹那に即ち仏力に攝取せられて光明の広海に浮ばしめられる。これひとえに仏の徳力の惠施の故である。

この故に一切善行の本は仏に帰依するに存すると教えられたのである。仏の大願業力に信賴するところ、これ修養の源なのである。この源に汲むことを恵まれた者は、世間を避ける必要はない。どんなに避けても惡業煩惱はわがいのちの内に動いて、忽ち汚穢有漏(おえうろ)の世間を造り出すことを知らせて頂いたから、同時にまた如何な惡業の因果がわが内外に動いても仏力不斷にこれを転化して無漏清浄の境涯を顕わしたまふことを信じさせて頂いたから。「念仏者は無碍の一道なり」と。「いづれの行も及び難き身」がただ帰依するところすなわち能く如何なる惡業も障碍をなし得ざる一道を得ること、これただ不思議の眞実である。

(昭和十三年四月十七日)

歎異抄のすすめ (三)

——道を求める若い男女のために——

田村実造

前回にいい足りなかったことを、もう少し述べさせてもらいましょう。

親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて信するほかに別の子細(しさい)なきなり

これが親鸞聖人を信一念の告白だと申しました。「じぶんはただひたすらに念仏して弥陀に救われるがよい」との法然上人の一言(ひとこと)を信じて念仏しただけである」との聖人のさりげない告白には、千言万句の重みを感じとれます。われわれ人間の性(さが)として、このように人を無条件に信じることは、なかなかできるものではありません。こうなるうらには、叡山における二十年にわたる、ひたむきの修学・修行にもかかわらず、心の安らぎを求めえなかつた苦悩と心のおせりとがあつたのです。そして聖

人は「いずれの行もおよびがたき身」だとの絶望感をいだいて、ついに山を下りたのでした。

しかし聖人は叡山を下りて、いきなり法然上人のもとに走つたではありません。六角堂における百日の参籠は、ゆきつまつた自分を見つめ、二十年間精進してきた聖道自力の道をすて去るべきか、はたまた他力念仏の道にすがるべきかと、もう一度念を押すための命がけの瞑想(めいそう)であつたと思ひます。そこで「地獄に落ちるほか行きどころのない」わが身であることを確めて、ついに吉水の念仏道場に走つたのでした。「地獄に落ちるほか行きどころのないわが身」とは、絶体絶命の聖人の心のさげびであつたのです。地獄などといっても、いまごろの人びとには笑ひをもつて聞きすこされるでしょうが、当時の平安・鎌倉時代の人びとには「地獄行き」とか「地獄に落ちる」などい

うことは、死にまさる苦しみをあらわす語であつたのです。なればこそ親鸞聖人は法然上人にはじめて接して、これぞわが善知識と得心するや、無条件にそのことばを信じることが出来たと思ひます。

善知識とは客観的にあるというよりも、じぶんに有縁(うえん)の知識、いわばこの人こそとじぶんで納得し得心しうる人であらねばなりません。聖人のような、どこどこまでも、おのが内心を追求し深く思索してゆく人、徹底した安心を求める人には、心底から師と仰ぎ、知識と仰ぐ人は容易にみつからなかつたのでしよう。その頃叡山には、おそらく数十百人をかぞえる高僧・知識と仰がれる人はいおそらく九才から二十九才まで真面目に修学し、真たてしようが、九才から二十九才まで真面目に修学し、真剣に修行した親鸞聖人は、叡山にあつて教育者としても求道者としても、すでにひとかどの仏道者として認められていたでしようから、聖人の納得しうるような知識にはなかなかめぐりあえなかつたのでしよう。第二条の原文に、

〔この親鸞が〕念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をも知りたるらんと、心にくくおほしめして、おわしまして、はんべらんは大いなるあやまりなり。もししからば、南都、北嶺にも、ゆゆしき学匠たち多く座(おわ)せられてせうろうなれば、かの人びとにも遇いたてまつりて、往生の要よくよくきかるべきなり。

とあるのは、当時の南都(奈良興福寺)や北嶺(比叡山)には学僧はいても真の体験者の少なかつたこと、さらにまたこのことばのうらには、下山以来南都・北嶺から異端視され、破戒者扱いにされて、たえざる迫害をうけてきた他力念仏者としての親鸞聖人の、かれらに対するせいりっぱいの皮肉の意もこめられているように思われます。

さて、いまいったように、親鸞聖人は法然上人を善知識として弥陀の本願(念仏)に救われましたが、その法然上人の善知識は中国唐代の高僧、善導大師でありました。

法然と善導 法然上人は親鸞聖人より四十才ばかり年上の十二世紀前半(一一三三)から十三世紀の初めごろ(一一二二)の人で、末法の世に救われるには念仏によるほかないと説かれて、浄土宗を創(はじ)められた元祖である。法然上人も叡山において長年修学・修行にはげんだが、民衆をすてて貴族のためにのみ現世利益を祈る北嶺仏教にあきたらず、悶悶、うつうつの日を送っていられたところ、善導大師の「観経疏」に

一心にもつぱら阿弥陀の名号を念じることによって浄土に往生できる。それが仏願にしたがうことだから。

とある法話を讀まれて、ハッと廻心されたのでした。承安五(一一七五)年、法然上人四十三才のときであつたといわれます。つまり法然上人の善知識は善導大師であり、そ

の大師の時代は六一三―六八一年といえは、初唐のころで法然上人よりも五百数十年も以前の、しかも国を異にする中国の人ですから、法然上人には歴史的時間・空間を超えた善知識であったわけです。法然上人は「観経疏」のあの法語を善導大師の肉声として弥陀の本願に参徹することができたのでした。上人の「選択本願念仏集」には善導大師に弥陀の玄義（本願）を授かる夢が語られているが、法然上人には善導大師こそ弥陀の応現として信じられていたのでしょう。また正信偈（ししようしんげ）に「善導独明仏正意」（善導大師のみが、ひとり仏の正しいお説を明らかにしている）とあるのは親鸞聖人も、善導大師こそただ一人仏の正意を承（う）けたもうと信じられていたのだと思います。

弥陀の本願まことにおわしますば、積尊の説教、虚言なるべからず。仏説まことにおわしますば、善導の御釈、虚言したもうべからず。善導の御釈まことならば、法然の仰せそらごとならんや。法然の仰せまことならば、親鸞が申すむね、またもてむなしかのべからずさうろうか。せんずるところ愚身の信心におきては、かくの如し。

とは 弥陀の本願である他力念仏が、積尊↓善導↓法然↓親鸞へと相承されてきていること、いわば他力念仏の教こ

しているものはすくないであろう。この第四条は自力聖道門と他力浄土門とを対比したのですが、唯円房がこの一文を歎異抄に収めているのには、もっと深いわけがあるように思われます。おもうに親鸞聖人は、関東にあって布教中しばしば聖道と浄土の対比について弟子達に語ったものではなかったろうか。なればこそ唯円房の耳底にもこの言葉が、しっかりと残っていたのでしょう。聖人は長年の求道のなかで、いよいよ自分の力なさを知らされ、自力修行をあきらめて叡山を下り、六角堂に参籠したとき、実にこの第四条にあるような自力聖道門と、他力浄土門について、さらにもう一度最後の熟考をかさねられたであろうと、わたくしは思います。

そのころ聖人は、すでに法然上人の他力念仏（浄土門）の教えは充分聞き知っておられたはずです。自力か他力か、聖道か浄土かの迷いをふっさるための瞑想を六角堂でつづけたのでしょう。そして「いずれの自力の行も及びがたき身」であることを改めて覚知させられて、他力浄土門に帰入したのだと思います。云われるように九十五日目に聖徳太子の夢告があったとすれば、それはこの日、この時に、聖人を吉水の法然上人のもとに走るべく決意させるのに役立つにすぎなかったのだと思います。

なんと云っても聖道門の頂点に立つ叡山の延暦寺は、か

そ積尊の直伝（じきでん）であることをのべられたもので、これこそ親鸞聖人のゆるぎない真信であったのです。

慈悲心と大慈悲心

第四条にうつりましょう。本文は、つぎのとおりです（現代かなずかい）

慈悲に聖道・浄土のかわりめあり。聖道の慈悲というは、ものをあわれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもうがごとくたすけとぐること、きわめてありがたし。浄土の慈悲というは、念仏して、いそぎ仏になりて、大慈大悲をもて、おもうあごとく衆生を利益するをいうべきなり。今生（こんじょう）に、いかにいとし不便（ふびん）とおもうとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば念仏もおすのみぞすえとおりたる大慈悲心にてさうろうべきと云々。

この本文の後半にある「今生に、いかにいとし不便とおもうとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし」の一文を、前半の「浄土の慈悲というは」の前、「おもうがごとく助けとぐること、きわめてありがたし」の後におきかえると、いっそうわかりやすいでしょう。

聖道の慈悲、自力の慈悲が始終ない（終始一貫しない）こと、それが末通らないことについて、これほど深く内省

って白河法皇（一〇八八―一一二八）をなげかせた当時よりは、やや下り坂にはありましたが、なお政治を左右し、社会人心を動かすほどの絶大な宗教的権威と勢力とをもっており、それにそむいて、彼等から見ればとるに足らない異端の念仏門に転向することは自殺行為にもひとしかったでしょうから、聖人としては決死の勇氣と熟慮とを要したことと思います。数年後の越後流罪の遠因は、このときに芽生えていたともいえるでしょう。

第四条は聖人の不動の信心を支える柱の一つであるとともに、この一文は聖道門に対し堂々と真向から対決して、浄土門の優位を主張しているもので、それまで聖道門を代表する南都・北嶺にしたいげられ、どうかつされてきた浄土念仏門の信仰上における正当な権利回復の宣言であり、大胆な挑戦であると思います。そこにはおだやかな表現にくるまれた親鸞聖人の強靱（きょうじん）な抵抗の精神さえうかがえます。

なお最後に一言しておかねばならないのは、第四条をその字づらだけで読みとると、今日の慈善事業や福祉事業は無意味で成り立たないと考える人があるでしょうが、それは聖人が自分の内心を深くつつこんで見つめた上での自己告発であり、われわれ自力の慈悲心は、そのように一貫しないからこそ、仏心の慈悲に立ちかえりつつ、せめても

と慈悲の心をふるい起こすべきではないでしょうか。

自分のことを引きあいに出して恐縮ですが、いまは年の瀬です。街頭には歳末助け合いとか、慈善鍋とか、さては身障者援護の会とか、いろいろの慈善や福祉のための催しが行われています。わたくしはそれらに行くわすたびに、小慈小悲もない身ながら、この第四条を憶いおこしつつ貧者の一燈を点じさせてもらっています。

第四条と相表裏するのは第五条だと思えます。その全文はつぎのとおり、

親鸞は父母の孝養のためとて、一べんにても念仏もおしたること、いまだそうらわず。そのゆえは、一切の有情（衆生・人類）は、みなもて世世生生（せせしうじよう、いつの世かは）の父母兄弟なり。いずれもいずれもこの順次生（次の世）に仏になりて助けそうらうべきなり、わがちからにてはげむ善にてもそうらわばこそ、念仏を廻向（えこう、たむける）して、父母をも助けそうらわめ。ただ自力をすてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道四生（どの世界）のあいだ、いずれの業苦（ごうく）ににじりめりとも、神通方便（自由自在な方法）をもて、まず有縁（うえん、じぶん縁あるもの）を度すべきなりと云云。

一 道 会 の 記

次いで西元宗助先生のお話を記させて頂きます。

簡単な話を三つばかりしたいと思っています。今日は十月三十日でございますが、今日の一道会には参れるかしらんと春から思っておりました。実際先程、榊原さんが仰言いましたように、自分で決めたことが仲々そうならないのですね。

十月二十日は金子大栄先生が亡くなられて一周忌でございます、それで頼まれて、東京で加藤弁三郎先生とご一緒に講演することになっておりまして、東京の方でピラを張られました。私の所へもその印刷物が来ていまして、これを有縁の人に送ってくれとのこと、知人にも送り、東京には榊原さんの御息の弘樹さんや私の兄弟がおりますので発送しました。十月二十日の新宿の〇〇ホールで講演すると印刷してありますので、宛名を書いて出せばよいのです。勿論私はその日東京へ行く積りでおります。所が十月十七・八日頃でしたが生れて始めて一寸倒れました。脳

この一文も、現代ですらかなり思いきった表現のように思えるが、平安・鎌倉時代の当時としては、実に大胆きわまる発言のように人びとには聞えたことでしょう。しかしすぐつぎの「そのゆえは、一切の有情は、みなもて世世生生の父母兄弟なり。云云」以下を読めば、前の第四条との関連で納得（なっとく）がゆくことと思えます。末とおらない慈悲、いや小慈小悲すらもないじぶんだと知らされてみると、父母の孝養のためとか、私利のためとかを願っての自力の念仏や祈願がいかに無力であるかに気づくでしょう。

だとすれば、自力の念仏、それに執着するじぶんをすて去って、いそぎ大慈大悲の念仏に帰入（めざめ）し、仏から廻向される念仏によって父母・兄弟らのわが縁につながる人びとを手はじめに、この世の人たちを助け救うこそ緊要なことです。

これは現代的にいえば、世界人類の救済運動にもつながる大理想ではないでしょうか。このような精神的うらつけがあれば、物質的救済運動も末通ってゆくだろうと思えます。

（昭和五十二年十二月稿了）

榊 原 徳 草

貧血だったのです。それで東京行きは御破算です。それをお知らせすることを忘れていまして大変です。十月二十日になり東京から電話がかかってくる、弘樹さんの奥さんからは、御子さんが二人いられるので留守番を頼んで会場へ行くと、西元先生急病で取止めであると、また私の親族からも、まあ、そういう事があって、当てにしているもそんなことであります。実はそんなことで能登半島の方にも御迷惑をかけました。あちらに子供の先生が居られ、三年前から講演に行くことになっていました。去年も学生部長をしておる関係で行けなくなり、今年は是非にと申しており、向うも宣伝ピラを出しておられましたのに申訳のないことでした。

従って本日も参れないかと思つて居りましたら、幸に伺うことが出来ました。二三日前に、家内に浄住寺さんへお参りしようとして、家内も喜んで参りました。一つは浄住寺は景色がよろしいですね。そこで元氣よく少し早めに家を出ましてバス、電車と乗換えて、先ず嵐山へまいりまし

て、そこから歩いて来ようとしたんです。近頃方針を変えて歩くことにし、ついでに煙草も止めました。

始めは私は上気嫌でしたが、つくづく思うんですが、私は直ぐ天気が変わるんです。時計を見ますと、時間が一寸無くなってくるし、イライラしてくる、家内はそれをチャンと解るんです。そこで苦心してタクシーを拾ってここへ参りました。そこで何を感じたかと申しますと私の悪い癖と云いますか御天気屋です。馬鹿は死ななきや直らないということですよ。

このことは印象深いのです。十年程前ですが、北米から来日して龍谷大学で真宗学を四五年勉強してあちらに帰って教師をしている人々が、仏教は学べば学ぶほどわからなくなると云う。で、私は、そうだ、何とも解らなくなる、それが仏法で解らうとするのが無理なんだ。と申したんです。そして浄土真宗は「本願を信じ念仏申さば仏になる」ということに尽きる、と申しましたら、そのことがどうしても解りません、学べば学ぶほどわからなくなる。

そこで私ハッと申して申しました。君ね、日本の諺の「馬鹿は死ななきや直らない」という、これを知っているかという、知っているという。それで、よろしい、本願を信じ念仏申すということは、馬鹿は死ななければ直らん、ナムアマミダブツ、と云いましたら、ハア、今日始めて

うなづけたと申します。私もそう云いながらスカッとしました。そして念のために申しました。これは人に向って、お前のような者は死なねば解らんと云うのではない。自分のような馬鹿を馬鹿と気付かぬ、本当の馬鹿者は死なねば解らないナムアマミダブツ、——そのことを久し振りに想いおこしました。何とか云うて解ったように申して居ります

が、これは死なねば直らない、そのことを思い出した。これが一つでございませう。

次にこの夏に富山の奥の五箇山という所へまいりました。ここは蓮如上人の御弟子の道宗が出られたところですが、そのあたりの人々は本当に素朴な、原始的太古の日本人の顔です。あした顔は他では見られない気がします。恐らく、二、三千年前の日本人の顔、その顔でお念仏申す人々です。ここで話をせよと申されました。

私はそこで榎本栄一氏の、こういう詩を読みあげたんです。「雑布は他の汚れを一生懸命拭うて、自分は汚れに泥（ま）みれている」拭うてやったという気持もなく、自分は汚れにまみれる、これは法蔵菩薩の「諸苦毒中、我行精進、忍終不悔」を唄ったものですが、これを話したんです。その後聴いていた方々はニコニコしながら、先生本当に有難うございましたと云われ、その中で一人の婦人が次のように話された。

「お盆前に大掃除をしたら、塵が一杯出てきた。それで塵箱に全部入れましたが、塵箱はきたないものを一杯入れられながら一寸もいやな顔をせず、全部受取ってくれます。撰取不捨ですナア。思わず塵箱さん、と、拝みた

いようなところで、塵箱さん、有り難うといいました。家の中の塵や埃をいやな顔をせず、黙って受取って下さる。そのお蔭で家の中は綺麗になりました。塵箱が仏様に感じられました。先生、雑布にも仏様がましますんねえ、先生有り難うございました」

と云われ、私は非常に教えられました。こんなことを何となく自然に話されたので今も思い出すことです。

第三に、池山榮吉先生の榮の字、金子大榮先生のも同じ榮の字です。あの榮という字はどういう風に思っているか、私は今度そのことを教えられました。榮の字は上に火が二つ書いてあります。そしてウかんむりがある下

に木があります。あの木は煩惱の木です。さて、昨年金子大榮先生が亡くなられました、大晦日だと思いますが、御遺族の方達がお淋しいだろうと思いで——私にも家の不幸を経験しており、よく解りますので年末に伺いました。するとよう来て下さつと迎えられて、皆様と一緒に思出話が出たんです。その時、御令息の洛北高校の先生をしていられる方が、うちの父は、大榮の榮の字には火が二つあります。どんなにそがしい時でも略字で書かずに、必ず火を二つ書きました、これは深い意味があ

ります。あの火は仏様の信心の「炎」です。父が云うておりました。自分は世間知らずで、融通利かず、我俣者で、どうにもならない。煩惱だらけで、しかも燃える木でなく湿った木である。

よく父は、金子は仏教の理屈はよく知っているが……と人様に云われたが、金子は煩惱の湿った木だと。その父の号は木然、仏智不思議の智が、信心の火が、この木然仁の木を燃え尽くされていきました。煩惱の湿った木に、どうにもならない木に「お慈悲にて候えば」と非常に悦んでいました。この感激をもって、榮の字の「火」はくずさずに必ず火を二つ書きました、と。

このお話をきいてハッと申して家に帰って金子先生から頂いたお手紙十数通を出してみると、火が二つチャンと書いてありました。私はそれを知らずに、先生に出す時にも略字で書いていました。

息子さんと奥様に、こんな男ですわと、申し上げたことです。この夏は五箇の庄にまいりまして合掌造り、五階建ての家ですが囲炉裏にチロチロ火を燃やして、木が湿っていて燻るんです。それを見ると私の姿で、不完全燃焼です。湿った木は仲々燃えず煙たいですね、私とよく似ているんです。これでははた迷惑です。パーッと燃えると美しいのに、仏法信者面をして、はた迷惑なことだと、こんなことを思いました云々。

念 仏 詩 抄

木 村 無 相

きつと

和上おおせに

// 呼びつめのお声を

聞きつめにすべし

きつと聞きつけさせて

くださるほどに——”

和上 禿頭誠師

きつと聞きつけさせて
くださると——

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

宿業の機は

和上おおせに

// 明信寺いわく

宿善のうすい者は

気持ち悪る悪る

日をおくる——

宿善深厚の機は

いのちがけに

骨折って聞く——”

// おのおの十余ヶ国の

お呼びかけ

阿弥陀如来の

ふと申さるる念仏も

弥陀の願力

聞きつけ皆さんの

弥陀の願力

聞く気になったも

まねきつめ

弥陀は呼びつめ

さかいを越えて
身命をかえりみずして——”

// たとい大千世界に

みてらん火をも過ぎゆきて

仏の御名を——”

骨折って聞く

骨折って聞く

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

仰せが仏法

和上おおせに

// 信ずるとは

仰せを信ずることじや

聞いた心が

仏法ではない

仰せが仏法とは

このことじや——”

聞いた心に腰かけて

仰せたのまで

わが機をたのむ

そうじやなかるう

そうじやなかるう

信ずるとは

仰せを信ずることじや

わが機をたのむことでない

仰せが仏法——

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ホトケ

和上お歌に

// 朝夕に

口より出づる

仏をば

知らですぎにし

ことのくやしき

ホトケを遠くに



求めたが

ホトケは口に

ナムアマミダブツ

あらわれたまうて

呼びかけたまう

わたしはなれて

ホトケなく

六字はなれて

ホトケなし――

ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ

そこに如来が

和上おおせに

〃だまされて

喜んでいる人よりも

心配してる人の方がど

れほど仕合せやらも

知れぬ――

オノがところに

だまされて

これでも助かると

喜んでいる人よりも

これではどうかと

心配してる人の方が

どれほど仕合せやら

知れぬ

心配しているそこに

如来が――

ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ

法 味 断 片

花 田 正 夫

三部経中の大蔵経

千葉乗隆師から「近世真宗の一学匠」の著書を頂いた。

そこに竜大の前身、本願寺学校の第四代校長、法霖師の生涯がのべられていた。

その序文に、法霖師の学則の一節

「今宗の学者、大蔵中の三部を学ぶなかれ、すべからく

三部中の大蔵を学ぶべし」

とあるとのことであった。これはもとより学林の学生への誠語であるが、仏法を学ぶ者の大思一番させられることである。

世間一般に仏教を歴史的、客観的に眺めて、釈尊は一切経を説かれたが、その中に浄土の三部経もあり、それから浄土教が出来たと見なされている。そこで仏教を学ぶ者がまず一切経を学び、その一派として浄土三部経を読む人が多い、法霖師の言う「大蔵中の三部を学ぶ」とはそのことへの大警鐘である。

先覚者達も「信なくして聖教を読めば名利の学となる」



ことを誡められている。そこに三部経に導かれて「聞其名号信心歡喜」の身となって、一切経を五返まで読破された法大海がひらけるのである。一切経を五返まで読破された法然上人が十悪愚痴、智目行足のない身にかえられて選択本願の念仏に帰して、凡夫の往生成仏の大道を高く掲げられた。地獄一定の身と言われた親鸞聖人が、その法然上人に開導せられて、信眼が開き、一切経をその信心の智慧で読破されて、教行信証をのこされたのであった。これが「三経中の大蔵を学ぶ」ことである。初めのボタンを間違えると終りまで間違うとゲエテも云ったが、仏道を学ぶ者の出発の初めにこの大切で懇切な学則を掲げられたのであると、改めて叩頭深謝させられた。

減度を示現して救済すること極りなし

大類純氏著の「釈迦」を数年前読んだ。そこに当初の長阿含経には開巻第一に釈尊の入涅槃からはじまっていたとあった。それで早速思いあたったのが、大無量寿経の、仏は減度を示現して、極りなく救済して下さるの一句であ

る。みじかな例で云えば、親が生存中はよくしてくれても当然と思つて軽く見ているが、亡くなってはじめて眞の親心が折にふれ時に遭うて段々子の身にしみてくる。まして三界の大導師、久遠のみ親にまします釈尊の肉体の滅亡は、不滅の仏徳の誕生となつたのである。

昔から花祭りの行事が行われているが、私の若い頃、死後はみんなその忌日をまつるのに、釈尊ばかりはどうして、その誕生会を催されるのであろうかと不審に思つたけれど、今にして、釈尊は永遠に生きて働いていられる、だから「常在靈鷲山」と、時間、空間にさえられぬ仏徳を古人が讃えたことも、大いにうなづかされることである。言葉をかえて言えば、釈尊の誕生がそのまま私共の久遠の生命の誕生の淵源であるから声高くそしてひろく花祭りを祝いたいものである。

彼国の衆生衆苦あることなし

かの国とは極楽のことであるが、そこには諸の樂しみばかりで、あらゆる苦はない、とのことである、かつて菊地寛が、極楽は寒むからず熱からず、百味の飲食は思うままであるが、それでは人々は退屈してむしろ地獄の変化を求め、といった諷刺をしたことがあるが、それは浅い読み方である。

ここに苦は何処を探してもなく諸樂がみちているとある

で下さるのである。

それなのにこうした読み方をして平気でいたのは、私自身が人間中心的な利己心にかたまつていて、その眼で自分勝手に解していたことによると強く反省させられた。こうした利己心こそ、大自然を破壊し、動植物を滅亡させて一向に取じと思わないおそろしい心そのものであった。

吾人は生死を併有す

これは清沢満之先生の名言である。然し軽く考えると、これは当然のことであると思ひ勝ちであるが、さて日常生活の生活はどうであるかとかえりみると、死は極力拒否して、生のことばかりを考えている。これではものを正しく見たとは云えない。始めあれば終りあり、表あれば裏は必ずある。それなのにこうした身びいきな心でいるから、裏が出、終りが来ると、こんなはずではなかつたと周章狼狽し、なすことを知らぬ状態におちる。

清沢先生が、御晩年、肺疾ようやくすすみ、死と直面された生活の中に「生のみが我等にあらず、死もまた我等なり」と語られたのは、我々が拒否してやまぬ死をも受け容れることの出来る、広い天地が先生の胸に開いていたからである。生と死を心におさめる人こそ、生死を超えた人といえよう。

おもうに、こうしたおこころは、先生の『他力の救済』

のは、深い味がある。私共が一般に樂しみと思う内には苦しみの暗い影が必ずつきまとうている。竜樹大士は、人々は、苦の初めを樂しみと思つていて、と訓えているが、全くその通りで、会う樂しみには別れの悲しみが添い、生れた歡びには死がつきまとうている、万事この通りであるのに、仏法を聞き、本願の船に乗せて頂く時、衆禍は波と転じ、苦の影のそわなない歡びがある。そこで地上の樂しみを超えた、極まれる樂しみの国と名づけられるのである。

「もの」をあわれむ

歎異抄の第四章に「ものをあわれみかなしみはくくむ」とあるが、私はながい間、ものとあるのをひとのことと單純に解していた。それにしてもどうしてもものとあるのかと不審に思い、「如来は為物身なり」とか「法とは、物のために解を生ず」などと、人のことを物といわれるのかとも思つてた。

ところが最近になってフト、一切衆生とは生きとし生けるものである。そのあらゆる衆生をあわれみかなしんで下さることであつたと気がついて、私が人間中心な考えから、ひとにだけとつていたことは、何という身勝手な偏見であつたかと、冷汗三斗、ただ恥じ入るばかりであつた。

「三界は皆わが有なり、三界の衆生は皆我が子なり」とみそなわす広大無辺な仏心から、ものをあわれみかなしん

の中に「我、他力の救済を念ずる時は、我が世に処するの道開ける」とあり「今や濁浪滔々（とうとう）の闇黒世裡にありて、つとに清風掃々の光明海中に遊ぶを得るもの、その大恩高德、あに区々たる感謝歎美の及ぶところならんや」とあるように、弥陀大悲のふところにおさめられて自然に「死もまた我等なり」と仰言ることができたのである。

宗教心は健全なる常識

近角先生が「宗教心は最も健全なる常識に外ならず」といわれているが、宗教心を欠く時は、偏見、邪見に知らず知らずおちこんで、狭い暗い部屋に閉じこめられる。

失則を重ねる人に、西郷翁は「火は握るものじやないがなあ」と云われたと聞く。火を火としてあつかえば暖もとれ、煮物も出来、調法なものである。そのように、人には欠点も長所もあるから、その特長をよく知って、適材適所におかれると、水の流れるように物事ははこび、多々益々辨ずるのである。それなのに、火から水を求め、水から火を求めて、こんな熱い火、こんな冷たい水と不平不満を云うのは自身がすでに非常識におちているからである。

このようにやりそこないのやまぬ身も、親に手をとられた腕白な子供のように、念仏に引きもどされ、ひきもどされて浄土への旅をさせていただけるのである。

あとがき

連れ多き浄土の旅や春の風と、お彼岸に入り、花のほころぶる時、善男善女の聞法の集いが催されるにつけ、住田智見帥が一句ものされたであろう。ほへえましい風景であります。

花は昔のままに咲いても、眺める人々は変る。こうした世に、徹底した信心の相を近角先生からお聞きしたいと願って信仰の奥底を頂きました。

又白井先生は、きびしい業を詳しく説いて下さり、業のおそろしさと、その業繫を超える道を知らせて頂きました。

「我罪の狂う荒野も無碍光の照らし給えば何をか恐れん」とは先生の信味の表白でした。

田村さんの歎異抄、榊原帥の一道会の記、まことにありがたく存じました。

木村さんは四月半ばまでの予定で入院加療を続けていられます、京都の文昌堂で念仏詩抄第四版が発行される由であります。

図書紹介

ここに道あり

西元宗助著、

定価 一、〇〇〇円

京都市東山区清閑寺山ノ内町五ノ五
中住ビル、三F・探究社。発行。

近世真宗の一学匠 千葉乗隆著

陳善院僧樸の生涯

京都市下京区中堂寺鍵田町二、同朋舎。

定価、一、五〇〇円

歎異抄

花田正夫著

——わが身誌記——

定価、一、八〇〇円、二二〇〇円。

東京都千代田区一番町九、柏樹社

(花田註)

昨年か柏樹社の方々の御好意によりまして、歎異抄について何か書くように勧め

られました。本抄に関する書は沢山出版されていますので、色々愚考しました。幸か

不幸、私自身が本抄によって教えられ、導かれてまいりましたことを書きましようとお

答えして筆をとりました。

私の一生は歎異抄からはじまったと思っ

ていますが、本抄の深さ広さははてしがありませんので、一章一章の門を叩いて、その門に立つて一寸瞥見した程度のものに終

りました。が、御縁のあるお方に一読していただき、何かとお叱声をお願い申します。

△御案内▽

○ 毎月第一、二、三日曜、午後一時半、一道会例会。

市バス、新那通り一丁目下車。

東入る三筋目左入る。

地下鉄、新瑞橋下車。名鉄呼続下車又は本笠寺下車、市バス乗りつき。

○ 毎月二十四日、午前午後。

昭和区小椋町、教西寺法話会。

市バス御器所通り下車、又は北山下車

地下鉄御器所下車

○ 毎月七日午后、「日曜には変更」尾西市三条板倉、蓮光寺修道会。

新一宮よりバス、西尾三条下車

定価 半年 七〇〇円(送共)
一年 一四〇〇円(送共)

名古屋市南区駄上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫
電話八二一七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷 人 坂部 光雄

名古屋市南区駄上町二ノ八八

發行所 慈光社
振替口座 名古屋 一〇四七〇番
郵便番号 四五七

慈光 第三十卷 第三号 昭和五十三年三月十五日発行(毎月一回・十五日発行)
昭和 二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可